ひたすらキリストの福音に
相応しい生活を送りなさい

フィリピ1章12～30節
2022年10月23日
松藤 紀年 師

《1. 町の背景》

フィリッピは、マケドニヤの州東部の港町、ネアポリスから15キロ内陸に入ったローマの植民都市で、新約時代、軍事的にも通商的にも重要な位置を占め、マケドニヤのこの地方第一の町となっていたようです。 住民は、ローマ人が退役軍人等の軍関係を中心に約半分、ギリシャ人が半分で、ユダヤ人は住んでいたものの会堂を建てるほどの数ではなく、町の門を出た川岸の「祈り場」で集会をしていたようです。

《2. 紫布商人リディアの救い》

パウロは第2回伝道旅行でフィリピを訪れ、数日間滞在します。 安息日になると、祈り場に集まっていた女性達に、主の福音を伝えます。(使徒言行録16:13) そこで先ず心を開いたのは、神様により近いと思われるユダヤ人ではなく、パウロとシラスの二人の予想に反し、異邦人でティアティラ市出身の紫布商人リディアでした。 彼女は、唯一の神を信じ、ユダヤ教に帰依していました。

『彼女の心の中には、パウロの熱い宣教を聞くまでは神様が、今一つ、しっくりこない思いで、いたようです。』

主が彼女の心を開かれたので、ただ一心に、パウロの話を注意深く聞き、理解する事に集中していました。 彼女の神様を求める心の渇き、真剣な姿勢が伝わります。 まさに、神様の御業が、相働きてイエス・キリストを主と告白し信じるに至ったと思っています。 なぜなら、

使徒言行録16章15節で、

「彼女も家族の者も洗礼を受けたが、そのとき、
『私が主を信じる者だとお思いでしたら、どうぞ、私の家に来てお泊まりください』
と言ってわたしたちを招待し、無理に承知させた」

とあるからです。 彼女は、神様を信じてからはフィリピ教会の中心的な働きを担っていたと思います。

《3. 占いの霊に取りつかれた女奴隷と、パウロの投獄》

また、フィリピ伝道では、占いの霊に取りつかれた女奴隷を癒したことで、不当に投獄されます。しかし、ここでも神様はパウロと共にいて、み業を示し導かれます。 パウロは、祈りの場に行く途中、占いの霊に取りつかれている女奴隷に出会います。 この女性は、占いで主人たちに、多くの利益を得させていました。

彼女は、パウロ達を、16章17節で、

「『この人たちは、いと高き神の僕で、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです。』
彼女がこんなことを幾日も繰り返すので、パウロは、その霊に言った。
『イエス・キリストの名によって命じる。この女から出て行け。』
すると即座に、霊が彼女から出て行った」

これは、あくまで個人的な思いですが、パウロの語る福音にふれる中で、救いに与ったのではないかと思っております。

ところが、彼女の主人達は、頼りの収入が絶たれた事で、パウロとシラスを捕らえ、役人に引き渡します。 高官は牢に入れ、看守に厳重に監視を命じます。 ところが、16章25節から、

「(その日の)真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美歌を歌って神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた。 突然、大地震が起こり、牢の土台が揺れ動いた。たちまち牢の戸がみな開き、すべての囚人の鎖も外れてしまった。」

「目を覚ました看守は、牢の戸が開いているのを見て、囚人たちが逃げてしまったと思い込み、剣を抜いて自殺しようとした。」

「パウロは大声で叫んだ。
『自害してはいけない。
わたしたちは皆ここにいる』
看守は、あかりを持ってこさせて牢の中に
飛び込み、パウロとシラスの前に震えながら
ひれ伏し、
『先生方、救われるためには
どうすべきでしょうか』」
と尋ねます。

16章31節から、
「二人は言った。
『主イエスを信じなさい。 そうすれば、
あなたも家族も救われます。』」
「そして、看守とその家の人たち全部に主の言葉を語った。 まだ真夜中であったが、看守は二人を連れて行って打ち傷を洗ってやり、
自分も家族の者も皆すぐに洗礼を受けた。」
さらに、高官たちは、38節から、
「二人がローマ帝国の市民権を持つ者であると聞いて恐れ、二人を牢から連れ出し、町から出て行くように頼んだ。」
「牢を出た二人は、リディアの家に行って兄弟たちに会い、彼らを励ましてから出発した。」
そしてフィリピの町を後にしました。

《4. エパフロディトの派遣》
フィリピの教会は、エパフロディト(ハンサムな)を獄中のパウロの所に派遣します。 その主な目的は、教会からの贈り物、それは広島名産「もみじ饅頭」ではなく、投獄のために、これまでのテント張りの収入が途絶え、伝道資金(献金)を届ける事と、パウロの宣教活動の支援とエパフロディト自身の研修の為であったと思われますが、見知らぬ街の環境、働き、更には、フィリピの教会の若きリーダーであったであろう彼は、神にも人にも奉仕にも、忠実なるが故に
『死ぬほどの病気』
に侵されます。 キリストの奉仕のためか、持病があったのか、はたまた、伝道旅行の強行、過労の為かは定かではありませんが、彼の病気の事が派遣したフィリピの教会に知らされた事を知ったエパフロディトは、自責の念にかられ、悩み苦しむ事になったと思われます。 彼は、おそらく繊細な性格だったのでしょう。

《5. パウロの祈り》
フィリピの教会は、先にも触れましたように、パウロの第2回伝道旅行の折、ネアポリスに上陸し、フィリピに数日間滞在しました。
その間、パウロは会堂ではなく町の門を出た川岸の祈り場で宣教を開始します。 フィリピでの初穂として紫布商人のリディアが救われ、また家族も共に洗礼を受け、その後、パウロの投獄中に看守とその家族共々救われ、次々に導かれます。
このようにして生まれた教会は、リディア、シンティケを始め、特に女性によって支えられた家庭的な特色のある教会になります。

フィリピ4章15節に、
「フィリピの人たち、あなたがたも知っているとおり、わたしが福音の宣教の初めにマケドニア州を出たとき、もののやり取りでわたしの働きに参加した教会はあなたがたのほかに一つもありませんでした。」
つまり、パウロに対して信頼と親愛の情をもって宣教の働きを助けて来た事が、パウロの祈りから読み取れます。

ただパウロにとって、ささいな事で人間関係がもつれている事を知り、釘を刺しています。
更に、パウロは投獄の折りに派遣してくれたエパフロディトのための祈りのリクエストもしています。
フィリピ、2章25～30節に、
「ところでわたしは、エパフロディトをそちらに帰さねばならないと考えています。 彼はわたしの兄弟、協力者、戦友であり、また、あなたがたの使者として、わたしの窮乏のとき奉仕者となってくれましたが、」
「しきりにあなたがた一同と会いたがっており、

自分の病気があなたがたに知られたことを
心苦しく思っているからです。」
「実際、彼はひん死の重病にかかりましたが、
神は彼を憐れんでくださいました。 彼だけで
なく、わたしをも憐れんで、悲しみを重ねずに
済むようにしてくださいました。」

「そういうわけで、大急ぎで彼を送ります。
あなたがたは再会を喜ぶでしょうし、
わたしも悲しみが和らぐでしょう。」
「だから、主に結ばれている者として大いに
歓迎してください。 そして、彼のような
人々を敬いなさい。」
「わたしに奉仕することであなたがたのできな
い分を果たそうと、彼はキリストの業に命をかけ、
死ぬほどの目に遭ったのです。」
フィリピの教会のパウロに対する祈りと支援には
ただならぬ感謝と喜びを表しています。
その中でもエパフロディトの派遣は、パウロの働き
の大きな支えであり、頼もしい後継者として期待し
ていた事も想像できます。

《6. フィリピの信徒のための祈り》
フィリピ1章1節から11節で、
「キリスト・イエスの僕であるパウロとテモテから、
フィリピにいて、キリスト・イエスに結ばれている
すべての聖なる者たち、ならびに監督たちと
奉仕者たちへ。」
「わたしたちの父である神と主イエス・キリストか
らの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」

「わたしは、あなたがたのことを思い起こす度に、
わたしの神に感謝し、」
「あなたがた一同のために祈る度に、いつも喜
びをもって祈っています。」
「それは、あなたがたが最初の日から今日まで、
福音にあずかっているからです。」

「あなたがたの中で善い業を始められた方が、
キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げ
てくださると、わたしは確信しています。」
「わたしがあなたがた一同についてこのように
考えるのは、当然です。 というのは、監禁
されているときも、福音を弁明し立証する
ときも、あなたがた一同のことを、共に恵みに
あずかる者と思って、心に留めているから
です。」
「わたしが、キリスト・イエスの愛の心で、あなた
がた一同のことをどれほど思っているかは、
神が証ししてくださいます。」

わたしは、こう祈ります。
「知る力と見抜く力とを身に着けて、あなたがた
の愛がますます豊かになり、」
「本当に重要なことを見分けられるように。
そして、キリストの日に備えて、清い者、
とがめられるところのない者となり、」
「イエス・キリストによって与えられる義の実をあ
ふれるほどに受けて、神の栄光と誉れとをたた
えることができるように。」

《7. 私にとって、生きるとはキリストを生きること》
パウロにとって、イエス・キリストとダマスコ途上
での出会い、回心がそれまでの人生を180度方向
転換させられた信仰の原点です。
パウロにとってイエス・キリストは生きるための目標
となった今、**生きることはキリストを生きる事**と
なったと思います。 暮らしの様々なところに於い
て、主が伴い、最善を成して下さる事を信じ従い、
生きるパウロにとって、フィリピでの監禁が自身の
犯罪によるものではなく、**福音を語るため**の必要
不可欠なキリスト者として、**見逃し、避けて通る道
でない事**を確信し、行動した**結果の代償**として
捉えていたと思っています。

パウロにとって、**監禁は**苦難ではなく**喜び**であ
り、**前進の出来事**として捉え、**宣教の闘志を燃や
す姿**を垣間見る事が出来ます。 パウロは、先ず、
フィリピの教会に向けて**投獄**が**福音の前進**に大き
な**転機**、**進展をもたらす好機**と報告の冒頭に書い

ています。

フィリピ1章12節から14節に、

「兄弟たち、わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったと知ってほしい。」「つまり、わたしが監禁されているのはキリストのためであると、兵営全体、その他のすべての人々に知れ渡り、」

「主に結ばれた兄弟たちの中で多くの者が、わたしの捕らわれているのを見て確信を得、恐れることなくますます勇敢に、御言葉を語るようになったのです。」

もしキリスト教が本当に神のものであるならば、もしパウロが真実、神に属するものであるならば、このような苦しい**屈辱的な敗北をこうむることはない**と確信したが故の行動と思います。

しかし、教会の中には、思いを異にする信徒がいたことも確かです。

フィリピ1章15節から18節で、

「キリストを宣べ伝えるのに、ねたみと争いの念にかられてする者もいれば、善意でする者もいます。」

「一方は、わたしが福音を弁明するために捕らわれているのを知って、愛の動機からそうするのですが、」

「他方は、自分の利益を求めて、獄中のわたしをいっそう苦しめようという不純な動機からキリストを告げ知らせているのです。」

「だが、それがなんであろう。 口実であれ、真実であれ、とにかく、キリストが告げ知らされているのですから、わたしはそれを喜んでいます。これからも喜びます。」

《8. 監禁がもたらすもの》

監禁中にローマの官憲が、パウロに対してどのような裁き判決を下すかは、パウロにとって、またフィリピの教会にとって、今後の宣教を左右する要因である事は確かな事です。

1章19節から27節に、

「あなたがたの祈りと、イエス・キリストの霊の助けとによって、このことがわたしの救いになると知っているからです。」

「そして、どんなことにも恥をかかず、これまでのように今も、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるようにと切に願い、希望しています。」

「わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです。」

「けれども、肉において生き続ければ、実り多い働きができ、どちらを選ぶべきか、わたしには分かりません。」

「この二つのことの間で、板挟みの状態です。一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。」

「だが他方では、肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です。」

「こう確信していますから、あなたがたの信仰を深めて喜びをもたらすように、いつもあなたがた一同と共にいることになるでしょう。」

「そうなれば、わたしが再びあなたがたのもとに姿を見せるとき、キリスト・イエスに結ばれているというあなたがたの誇りは、わたしゆえに増し加わることになります。」

「ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい」

とパウロは私達に求めています。

わたし達キリスト者は、改めて、神様の前に立ち、日々の信仰生活を見詰め直し、如何なる状況の中にも主を見上げ**感謝と喜びをもって隣人に仕え**、絶えず**最善を成して下さる主を信じ証しする者**として下さるように共に祈りましょう。